

Title	山岸健先生の思い出
Sub Title	
Author	浜, 日出夫(Hama, Hideo)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.35- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：青池先生と山岸先生を悼む～あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

山岸健先生の思い出

浜 日出夫

僕は山岸先生が慶應義塾大学を退職された1999年に先生の後任として着任しましたので、先生の授業を聴かせていただいたことはありませんし、「あの頃の三田社会学」というテーマにあまりふさわしくはありませんが、先生は僕の人生のターニングポイントで折々に深く関わってくださったので、この機会にそれを振り返ってみたいと思います。

僕が先生にはじめてお目にかかったのは現象学的社会学研究会でのことでした。当時シュッツやエスノメソドロジーに関心を持つ院生たちが作っていたのがこの研究会でした。那須壽さんの正確な記憶と記録によれば¹⁾、第1回の現象学的社会学研究会は1980年、八王子のセミナーハウスで開催されています。関西でも大阪市立大学におられた片桐雅隆さんを中心に関西現象学的社会学研究会が結成されていました。そのころ僕は大阪大学の助手でした。最終講義でも述べましたが²⁾、当時、現象学的社会学は、マルクスをやっている人からは「私生活主義」、パーソンズをやっている人からは「主観主義」「ミクロ社会学」とけなされるか、さもなければ単なる流行とみなされていました。僕たちに共感を示してくださる年長の先生がほとんどおられなかったなかで応援してくださった数少ない先生のお一人が山岸先生でした。第2回の研究会は、翌年1981年10月12日に三田キャンパスの塾監局3階の第3会議室で開催され、僕もそこで報告をしました。研究会の後、現在の北館の場所にあった山食で懇親会が開かれ、そこで先生とはじめて親しくお話をさせていただくことができました。

研究会から戻ってすぐに僕は「ピグマリオンとメドゥーサ」という論文を『社会学評論』に投稿しました。それはシュッツとパーソンズの論争、およびシュッツのフッサール批判、サルトル批判を手がかりとして、シュッツの「現象学的社会学」の学問論的位置づけについて考察したものでした。現象学的社会学が、実証主義に対する批判として「現象学的」であると同時に、超越論主義に対する批判として「社会学的」であり、実証主義と超越論的現象学の「中間」に位置していることを示そうとしたものでした。その年の年末に審査結果が戻ってきました。そのうちの一つは見覚えのある墨痕鮮やかな万年筆の書体でした（本当はブラインド・レビューですが40年も前のことですのでもう時効でしょう）。ファイルの中にその査読結果が残っています。そこには「本論文は、シュッツの位置づけに明確な見方を示したものであり、また、現象学的社会学のパースペクティブについても綿密な考察を試みたものとして注目される。つづく論文にも期待したいと思う」と温かい励ましの言葉が添えられていました。先生は僕が研究者として第一歩を踏み出す後押しをしてくださいました。

このファイルにはもう1通葉書が残されています。この論文は翌年1982年6月発行の『社会学評論』に掲載されました。8月8日消印の葉書で「慶応大学教授 横山寧夫」の名前があります。記録のために書き写しておきます。「拝啓 面識のない方に突然おたよりする非礼をお許しください。過日の「評論」の「ピグマリオンとメドゥーサ」はとてもよく書いて感服しました。私も多少その方面のことを嚙っていて、少し云いたいこともあるのですが全体として最近の論文の中でも出色だと思います。今日学会名簿を送って来ましたので、何となく筆をとりました。出身は大阪大のようですが徳永恂君とは社会思想史学会で一緒に仕事をしています。それとも山口君のお弟子さんですか。新潟大の那須君も親しく何度か拙宅に見えられました。お若いと思うが今後の活躍を祈ります。」横山先生とは慶應赴任後、一度

だけ文学部懇親会でご挨拶させていただくことができました。

横山先生から葉書をいただくすし前の 1982 年 4 月に僕は新潟大学に赴任しており、そこで那須さんと再会しました。これも那須さんによれば³⁾、1985 年 4 月 22 日にカナダのヨーク大学のジョン・オニール教授が新潟大学に來られコロキウムを開催しています。そのご縁で僕はカナダに留学しようと考え、日本学術振興会の特定国派遣研究者制度に応募することにしました。オニール教授のもとで研究すると同時に、トロント近郊のウォータールーという町にあるウィルフリッド・ローリエ大学のシュッツ文庫で調査を行う計画でした。特定国派遣研究者制度では二人の審査員がつき、二人とも〇をつけないと合格になりません。あとから知ったことですが、僕の審査を担当してくださったのは山岸先生と早稲田大学の佐藤慶幸先生だったそうです（これももう時効だからいいでしょう）。そんなことはまるで知らないまま僕は 1987 年 4 月に初めての留学に出発しました。先生は僕の留学の背中も押してくださったことになります。

1 年間の留学を終えて日本に戻り、僕は 1988 年 4 月筑波大学に移りました。筑波大学にいたる間も 12 月第 1 週の週末に開催される現象学・社会科学会で毎年のように先生にお目にかかっていました。そして 1999 年先生が慶應を退職され大妻女子大学に移られたときに、僕は思いがけずその後任として慶應に呼ばれることになりました。ウェーバーが「大学の教員は誰しもその就任の事情を回想するのを好まない」⁴⁾と書いているように、僕もそれには触れないでおくことにします。こうして先生の導きのおかげで僕は慶應での研究生活をスタートすることになりました。

「合同ゼミナール」のことを思い出します。山岸先生、法政大学の田中義久先生をメンターとして、大妻の草柳千早ゼミ、法政の鈴木智之ゼミ、慶應の浜ゼミが、たいてい 11 月の勤労感謝の日のころに八王子のセミナーハウスで 1 泊 2 日の合宿を行なって互いにゼミの成果を発表しました。先生はたいへん楽しそうにコメントを述べられていました。この時期、野猿峠の森の中はいつも盛大に落ち葉が舞っていたことを思い出します。

また先生からは折々にたくさんの葉書をいただきました。故郷長岡から見た妙高山の景色、アネモネの花の絵などが、先生自筆のデッサンで添えられていました。僕は筆不精で半分もお返事を出しませんでした。まことに不肖の後任であったとおわびするしかありません。

最後に先生から教えていただき、先生もたびたび引用されていたアランの言葉を引用してこの「思い出」を終えたいと思います。

「私はコントのつぎの思想を好む。すなわち、象や馬や狼に欠けていたものは、おそらく、廟や神殿や劇場を築き、その周囲または内部に集まる暇だけだった、というのである。(中略)よく見れば、彼らすべてに欠けているものはモニュメントである。つまり、存続し、次の世代を教育するものである。そして、モニュメントのうちには道具をもかぞえねばならない。動物があとに残すものは、彼らに似た存在、そして自分の形に従ってあらたに生を営む存在のほか何もない。ハチの巣は、ハチそのものと同様に、やりなおしである。そして、この驚くべき共同体は、けっして社会ではないのである。／人間の社会——これこそ真に社会である——を作るものは、別種の遺産である。それは家であり、神殿であり、墓であり、シャベルであり、車輪であり、鋸と弓であり、境界標であり、碑銘と書物であり、伝説であり、礼拝と像であり、要するに、生者にたいする死者の支配であって、これによって、パスカルの有名な言葉によれば、人類は不断に学ぶただ一つの存在のごときものとなるのである。」⁵⁾

この言葉に、先生は「生者にたいする死者の支配」——コントの、コントとアランの、決定的な言葉である。人間社会は、さまざまな社会的遺産、文化的遺産、記念碑、記念となっているもの、モニュメントと道具によって歴史的で文化的な社会、まさに人間的世界となっている」という言葉を添えられています。僕のその後の研究の指針ともなった言葉です。

【註】

- 1) 那須壽「浜日出夫さんとの40年」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第89号、88頁、2020年。
- 2) 浜日出夫「社会学再入門」『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要』第89号、79頁、2020年。
- 3) 那須壽、同上。
- 4) ウェーバー、尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫、1973年、20頁。
- 5) 山岸健・山岸美穂『日常生活と旅の社会学』慶應義塾大学出版会、2008年、394頁。

(はま ひでお 慶應義塾大学名誉教授・東京通信大学)